

地域環境 NPO の持続的活動展開と会員層

— NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の会員アンケート調査の 3 時点クラスター分析 —

山添 史郎, 塚本 利幸, 霜浦 森平, 野田 浩資

1. 課題の設定

1.1. 地域環境 NPO の持続的活動展開と地域コミュニティ

筆者らは、身近な地域の環境保全に取り組む NPO・ボランティア団体を地域環境 NPO と位置づけ、研究を進めてきた（霜浦他, 2002；野田, 2007；山添他, 2008；霜浦他, 2009；野田, 2016；山添・野田, 2018）。日本の環境 NPO については、欧米の NPO に比べ、「会員数は少なめ」（Pekkanen, 2005 = 2008：64）で「かなり少ない財政的資源しかもたない」（Pekkanen, 2005 = 2008：64）、「有給スタッフが常駐する組織はごくわずか」（菊池, 2005：71）など、組織基盤の脆弱性が指摘されており、環境 NPO の中には、停滞状況に陥り、活動を休止する NPO も少なくない。

鳥越は、「NPO の活動のうまくいっているケースは、NPO のリーダーが住民の考え方をよく理解していて、地元の自治会を表に立てているところである」（鳥越, 2014：89）としており、広井は、NPO その他のミッション型コミュニティと自治会・町内会等を含む伝統に根ざした地域コミュニティとのクロス・オーバーないし融合が大きな課題となる（広井, 2009：84-85）とし、中川も、「コミュニティ系団体と NPO 型団体の構成員である市民同士の出会い」（中川, 2011：47）や「人材相互のクロスオーバー」（中川, 2011：47）が重要であるとしている。地域環境 NPO においては、NPO と地域コミュニティとが、どのように連携しているか、さらには、どのように双方の担い手が交叉しているかが、持続的活動展開の鍵の 1 つであるといえよう。

本稿で事例とする NPO 法人「びわこ豊穰の郷」（以下「びわこ豊穰の郷」）においては、地域社会のニーズや期待に応え、活動内容や組織体制を変化させ、NPO の役割の比重を変化させることで、持続的に活動してきており（山添・野田, 2018）、NPO と地域社会との組織レベルでの連携が行われてきている。一方、本稿では、「びわこ豊穰の郷」の会員層に着目し、NPO と地域コミュニティとの担い手レベルでの交叉がどのように進展してきたかを検討する。

1.2. 地域環境 NPO の展開プロセスと会員層

「びわこ豊穡の郷」の展開プロセスは、「第Ⅰ期：設立・整備期」「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」という 3 つのフェーズに区分できる（野田，2016）（表 1）。

表 1 「びわこ豊穡の郷」の展開プロセス

年	NPO のフェーズ	主な活動の内容
1996	「第Ⅰ期：設立・整備期」 (1996 年～2000 年)	「豊穡の郷赤野井湾流域協議会」設立
1997		「水環境マップⅠ」作成
1998		「よりよい赤野井湾流域にする対策の提言書」作成
2001	「第Ⅱ期：成長・定着期」 (2001 年～2008 年)	「第 9 回世界湖沼会議守山セッション」開催
2003		「第 3 回世界水フォーラム in 守山」への参加・協力
2004		NPO 法人「びわこ豊穡の郷」発足、はたるパーク＆ライド事業の開始
2005		いきづく湖沼ふれあいモデル事業（環境省）受託（2007 年まで）
2006		守山市立はたるの森資料館の指定管理者に採択
2007		全国都市再生モデル調査（国土交通省）受託
2009	「第Ⅲ期：成熟・転換期」 (2009 年～)	赤野井湾湖岸・小津袋クリーン大作戦の開始
2013		オオバナミズキンバイの除去活動の開始
2014		認定 NPO 法人として認定

（出所）野田（2016）

「第Ⅰ期：設立・整備期」（1996 年～2000 年）は、団体の立ち上げの時期となるフェーズである。「第Ⅰ期：設立・整備期」においては、守山市が事務局を担い、滋賀県・守山市からの補助金を主な財源として運営が行われていた。「第Ⅱ期：成長・定着期」（2001 年～2008 年）は、体制の整備と安定的運営および活動範囲の拡張の時期となるフェーズである。「第Ⅱ期：成長・定着期」においては、NPO 法人化がなされ、事務局も行政職員から NPO の専従スタッフへと移行し、主な財源も補助金から委託金へと移行した。「第Ⅲ期：成熟・転換期」（2009 年～）は、活動の見直しなど、持続に向けた模索の時期となるフェーズである。「第Ⅲ期：成熟・転換期」においては、「第Ⅱ期：成長・定着期」の体制を継承しつつも、活動の見直し等が行われてきている（野田，2016）。

筆者らは、1999 年（「第Ⅰ期：設立・整備期」）／2007 年（「第Ⅱ期：成長・定着期」）／2015 年（「第Ⅲ期：成熟・転換期」）の 3 時点（3 つのフェーズ）に実施した会員アンケート調査の結果をもとに、「びわこ豊穡の郷」の会員構成の変化（山添他，2015）を明らかにしてきたが、本稿では、3 時点（3 つのフェーズ）における「びわこ豊穡の郷」の会員層について、検討を行う。筆者らは、2007 年調査の結果をもとに、「びわこ豊穡の郷」の会員層を「コア活動層」「自治会活動層」「共感支持層」という 3 層に区分した（山添他，2014）が、本稿では、第 1 に、1999 年（「第Ⅰ期：設立・整備期」）／2007 年（「第Ⅱ期：成長・定着期」）／2015 年（「第Ⅲ期：成熟・転換期」）の 3 時点（3 つのフェーズ）においても、会員層に同様の傾向がみられるのか、もしくは、3 時点（3 つのフェーズ）ごとに、会員層に相違がみられるのかを明らかにし、第 2 に、3 時点（3 つのフェーズ）の会員層における「地付層」の参加の変化に着目し、NPO と地域コミュニティの担い手の交叉がどのように進展してきたかを検討する。

1.3. 調査の概要と本稿の構成

「びわこ豊穡の郷」(1999 年当時は「豊穡の郷赤野井湾流域協議会」)の会員へのアンケート調査については、郵送法により実施し、調査対象者数(会員数)は、減少傾向にあるものの 300 人台で推移し、すべての調査において、回答者数は、200 人台となっており、回収率は、50%を上回っている(表 2)^{*1}。筆者らは、「びわこ豊穡の郷」の前身である「豊穡の郷赤野井湾流域協議会」の設立当初から、行事への参加等の参与観察やコアメンバーへのインタビュー調査を実施してきており、会員アンケート調査の結果の解釈にあたっては、これらで得た知見も用いる。

表 2 3 時点の会員アンケート調査の概要

	1999 年調査 「第Ⅰ期：設立 ・整備期」	2007 年調査 「第Ⅱ期：成長 ・定着期」	2015 年調査 「第Ⅲ期：成熟 ・転換期」
調査対象者数 (会員数)	392 人	363 人	324 人
回答者数	203 人	228 人	223 人
回収率	51.8%	62.8%	68.8%

(出所) 山添他 (2015)

本稿の構成について述べる。2 節では、「びわこ豊穡の郷」の会員構成の変化について述べる。3 節では、「第Ⅰ期：設立・整備期」の会員層について、4 節では、「第Ⅱ期：成長・定着期」の会員層について、5 節では、「第Ⅲ期：成熟・転換期」の会員層について、検討を行う。6 節では、会員層の 3 時点比較を行うとともに、地域環境 NPO の展開プロセスにおける NPO と地域コミュニティの担い手の交叉について、検討を行う。

2. 「びわこ豊穡の郷」の会員構成の変化

1999 年(「第Ⅰ期：設立・整備期」)／2007 年(「第Ⅱ期：成長・定着期」)／2015 年(「第Ⅲ期：成熟・転換期」)の 3 時点(3 つのフェーズ)ごとの居住歴による会員構成の変化を示す(図 1)^{*2}。3 時点(3 つのフェーズ)でみると、「第Ⅰ期：設立・整備期」から「第Ⅲ期：成熟・転換期」にかけては、「地付」の割合が減少し、「市外」の割合が高くなってきている。「地付」の会員においては、設立当初に自治会・町内会を通じて、入会してきた人たちが多く、これらの会員が高齢化等により退会し、全体としては、割合が減少してきていると考えられる。一方、「市外」の会員においては、設立当初は、団体の立ち上げに関わった専門家や行政職員等が中心であったこと

*1 2007 年調査の調査票については、野田編(2009)を、2015 年調査の調査票については、野田編(2017)を参照。1999 年調査の分析結果については、野田他(2000)等を参照。2007 年調査の分析結果については、山添他(2008)、霜浦他(2009)、山添他(2014)等を参照。1999 年調査／2007 年調査／2015 年調査の比較分析については、山添他(2015)、山添他(2017a)、山添他(2017b)を参照。

*2 「びわこ豊穡の郷」が主として活動を行っている滋賀県守山市は、混住化地域であるために、会員の居住歴は多様なものとなっている(山添他、2008；山添他、2017a；山添他、2017b)。

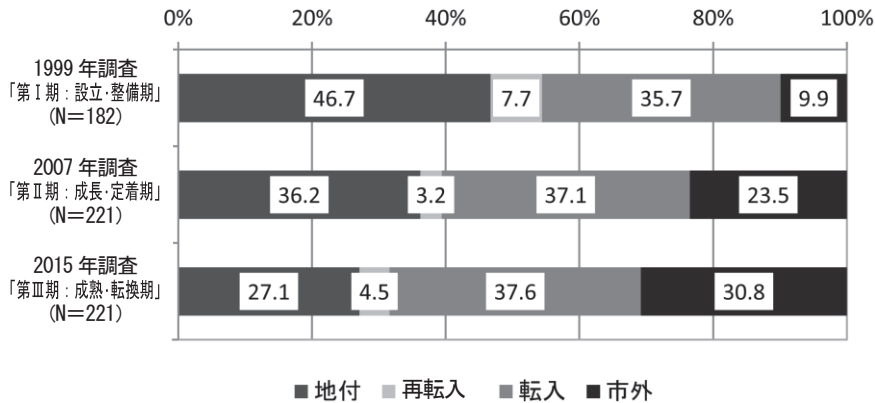


図 1 居住歴による会員構成の変化

(注) $p \leq 0.01$ (χ^2 検定, 漸近有意確率 (両側))

(出所) 山添他 (2015)

から、その割合は低かったが、その後、学生ボランティアとして携わった人たちが入会し、割合は増加してきていると考えられる（山添他, 2015）。

以上のように、3 時点（3 つのフェーズ）でみると、居住歴による会員構成については、「地付」において、割合が減少し、「市外」においては、割合が高くなってきているという変化がみられた。一方、「転入」においては、割合に大きな変化はみられなかった。以後、3 節から 5 節では、「びわこ豊穰の郷」の 3 時点（3 つのフェーズ）の会員層について、どのように変化があったかを検証していこう。

3. 「第Ⅰ期：設立・整備期」の会員層

3.1. 「第Ⅰ期：設立・整備期」の会員層のクラスター分析

1999 年調査（「第Ⅰ期：設立・整備期」）について、会員の活動への関わり方の相違をもとに会員層を区分する。クラスター分析には、「調査研究活動部会への所属」「改善対策実践活動部会への所属」「広報委員会への所属」「行事・イベントへの参加」「部会会議への出席」「地域での清掃活動等への参加」という 6 つの設問を用いる。

1999 年調査時（「第Ⅰ期：設立・整備期」）の「びわこ豊穰の郷」においては、「調査研究活動部会」「改善対策実践活動部会」「広報委員会」が活動の中心を担う組織となっており、活動への参加の形態については、「行事・イベントへの参加」と「部会会議への出席」に大別することができた。「行事・イベント」には、中心メンバーとともに多くの一般会員が参加していたが、「部会会議」については、組織の方向性等の議論や事業の企画立案が行われることから、中心メンバーが出席することが多かった。一方、「びわこ豊穰の郷」が活動を行う守山市においては、自治会・町内会を単位とした水環境保全活動も活発に行われており（山添他, 2003）、「びわこ豊穰の郷」には、

地域での活動に取り組む人たちも多い。これらの6つの設問は、活動への関わり方の相違をもとに「びわこ豊穡の郷」の会員を区分するために相応しい設問であると考えられる。

6つの設問を用いて、クラスター分析（最遠法）を行った結果、会員は3つのクラスターに区分された。3つのクラスターについて、分析に用いた設問とのクロス集計を行い、各クラスターの解釈を行う（表3）。

表3 クラスター分析の結果の解釈（1999年調査／「第Ⅰ期：設立・整備期」）

		クラスターⅠ 「コア活動層」 (N = 29)	クラスターⅡ 「自治会活動層」 (N = 121)	クラスターⅢ 「共感支持層」 (N = 23)	会員全体 (N = 173)
調査研究活動部会への所属 **		72.4	40.5	52.2	47.4
改善対策実践活動部会への所属 **		55.2	25.6	21.7	30.1
広報委員会への所属		20.7	10.7	17.4	13.3
行事・イベントへの参加 **	ほぼ全てに参加，2回に1度以上参加，3回に1度程度参加している	100.0	15.7	13.0	29.5
	ときどき参加している	0.0	42.1	47.8	35.8
	まったく参加していない	0.0	42.1	39.1	34.7
部会会議への出席 **	ほぼ全てに参加，2回に1度以上参加，3回に1度程度参加している	100.0	11.6	4.3	25.4
	ときどき参加している	0.0	32.2	47.8	28.9
	まったく参加していない	0.0	56.2	47.8	45.7
地域での清掃活動等への参加 **	よく参加している	79.3	71.1	0.0	63.0
	ときどき参加している	6.9	24.8	0.0	18.5
	あまり参加したことがない， いままで参加したことがない	0.0	4.1	0.0	2.9
	活動が行われていない， 分からない	13.8	0.0	100.0	15.6

(注1) 単位：％

(注2) **p ≤ 0.01 ※暫近有意確立（両側）

第1に、クラスターⅠは、全体に比べ、「調査研究活動部会への所属」「改善対策実践活動部会への所属」「広報委員会への所属」において、「所属している」とする割合が高く、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」においても、参加の程度が高くなっていた。クラスターⅠは、「びわこ豊穡の郷」への参加の程度が特に高いことから、「コア活動層」として位置付けられる。

第2に、クラスターⅡは、全体に比べ、「地域での清掃活動等への参加」において、参加の程度が高い一方、「調査研究活動部会への所属」「改善対策実践活動部会への所属」においては、「所属している」とする割合はやや低く、「行事・イベントへの参加」「部会会議への出席」においても、参加の程度がやや低くなっていた。クラスターⅡは、「びわこ豊穡の郷」への参加の程度がやや低い一方、自治会における水環境保全活動への参加の程度が高いことから、「自治会活動層」として位置付けられる。

第3に、クラスターⅢは、全体に比べ、「行事・イベントへの参加」「部会会議への出席」において、参加の程度が低くなっていた。一方、「調査研究活動部会への所属」において、「所属している」

とする割合がやや高く、「改善対策実践活動部会への所属」においては、「所属している」とする割合は低く、「自治会での清掃活動等への参加」においては、参加の程度が特に低くなっていた。クラスターⅢは、「びわこ豊穰の郷」への参加の程度が「コア活動層」に比べ低く、自治会における水環境保全活動への参加の程度は、特に低いことから、「びわこ豊穰の郷」への共感から入会し、選択的に活動に参加している「共感支持層」として位置付けられる。

3.2.「第Ⅰ期：設立・整備期」の会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係

クラスター分析から得られた会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係をみてみたい。

会員層と基本属性・社会的ネットワーク（性別、年齢、職業、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度、他のボランティア団体への加入の有無）の関係について、分析を行った結果、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度において、有意な差が示された（表4）。

表4 会員層×基本属性・社会的ネットワーク（1999年調査／「第Ⅰ期：設立・整備期」）

		「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
居住歴 ** (N = 154)	地付	30.8	58.5	4.5	46.1
	再転入	11.5	7.5	9.1	8.4
	転入	57.7	25.5	50.0	34.4
	市外	0.0	8.5	36.4	11.0
農家／非農家 ** (N = 160)	農家	25.0	53.6	4.5	41.9
	非農家	75.0	46.4	95.5	58.1
近所づきあい ** (N = 169)	相談事をするぐらい親しくしている、よく世間話をする	82.8	73.7	40.9	71.0
	たまに立ち話をする、あいさつをするだけ、ほとんど付き合っていない	17.2	26.3	59.1	29.0
自治会・町内会行事への参加 ** (N = 170)	ほとんどすべてに参加している	75.9	70.6	31.8	66.5
	関心に応じて参加している	20.7	26.9	54.5	29.4
	ほとんど参加していない	3.4	2.5	13.6	4.1

（注1）単位：％

（注2）** $p \leq 0.01$ ※暫近有意確立（両側）

居住歴については、「コア活動層」において、全体に比べ、「転入」の割合が高く、「自治会活動層」においては、「地付」の割合が高く、「共感支持層」においては、「市外」の割合が高く、「転入」の割合も高くなっていた。

農家／非農家については、「コア活動層」において、全体に比べ、「非農家」の割合がやや高く、「自治会活動層」においては、「農家」の割合が高く、「共感支持層」においては、「非農家」の割合が特に高くなっていた。

近所づきあいの程度については、「コア活動層」において、全体に比べ、つきあいの程度が高く、「共感支持層」においては、つきあいの程度が特に低くなっていた。

自治会・町内会行事への参加の程度については、「コア活動層」において、全体に比べ、参加の程度が高く、「自治会活動層」においては、参加の程度がやや高く、「共感支持層」においては、参加の程度が低くなっていた。

「コア活動層」においては、「転入」「非農家」の割合が高く、「近所づきあいの程度」が比較的豊富で、「自治会・町内会行事への参加の程度」の高い会員の割合も高くなっていた。守山市内でも、新興住宅地など農村地域以外に居住している会員が比較的多く、自治会においても活動するリーダー層が多かったものと考えられる。

「自治会活動層」においては、「地付」「農家」の割合が高く、守山市内でも農村地域に居住している「地付層」の会員が多かったものと考えられる。

「共感支持層」においては、「市外」「非農家」の割合が高く、「近所づきあいの程度」「自治会・町内会行事への参加の程度」の低い会員の割合が高くなっていた。守山市外に居住している支援者層の会員が多かったものと考えられる。

3.3. 「第Ⅰ期：設立・整備期」の会員層と「活動の志向性」の関係

会員層と「活動の志向性」との関係をもてみたい。

「活動への評価」について、会員層による比較を行ったところ、「改善対策提言書のとりまとめ」「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」において有意な差が示された（表5）。

表5 会員層×活動への評価（1999年調査／「第Ⅰ期：設立・整備期」）

		「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
改善対策提言書のとりまとめ* (N = 148)	たいへん評価している	46.4	20.6	22.2	25.7
	その他	53.6	79.4	77.8	74.3
水環境マップ* (N = 151)	たいへん評価している	57.1	28.8	26.3	33.8
	その他	42.9	71.2	73.7	66.2
地域の一斉清掃活動* (N = 146)	たいへん評価している	40.7	32.4	5.9	30.8
	その他	59.3	67.6	94.1	69.2
インターネットのホームページ** (N = 145)	たいへん評価している	22.2	4.0	0.0	6.9
	その他	77.8	96.0	100.0	93.1
プロジェクト形式の活動** (N = 144)	たいへん評価している	25.9	8.1	0.0	10.4
	その他	74.1	91.9	100.0	89.6

(注1) 単位：%

(注2) **p ≤ 0.01, *p ≤ 0.05 ※暫近有意確立（両側）

「コア活動層」においては、全体に比べ、「改善対策提言書のとりまとめ」「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」を評価する割

合が高く、「自治会活動層」においては、「地域の一斉清掃活動」を評価する割合がやや高く、「改善対策提言書のとりまとめ」「水環境マップ」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」を評価する割合がやや低くなっていた。一方、「共感支持層」においては、全体に比べ、「地域の一斉清掃活動」を評価する割合が特に低く、「水環境マップ」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」を評価する割合が低くなっていた。

「今後重視すべき活動」について、会員層による比較を行ったところ、「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」において、有意な差が示された（表6）。

表6 会員層×今後重視すべき活動（1999年調査／「第Ⅰ期：設立・整備期」）

		「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
他の環境ボランティア団体との交流* (N = 154)	たいへん重要である	53.6	29.2	15.0	31.8
	その他	46.4	70.8	85.0	68.2
身近な川や水路の水量の年間を通しての確保** (N = 153)	たいへん重要である	78.6	53.3	35.0	55.6
	その他	21.4	46.7	65.0	44.4
身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備** (N = 155)	たいへん重要である	71.4	43.0	25.0	45.8
	その他	28.6	57.0	75.0	54.2
専門的な知識や情報を得るための学習会の開催** (N = 154)	たいへん重要である	46.4	16.8	15.8	22.1
	その他	53.6	83.2	84.2	77.9

（注1）単位：％

（注2）** $p \leq 0.01$, * $p \leq 0.05$ ※暫近有意確立（両側）

「コア活動層」においては、全体に比べ、「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」を重視する割合が高く、「自治会活動層」においては、「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」を重視する割合がやや低くなっていた。一方、「共感支持層」においては、全体に比べ、「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」を重視する割合が低くなっていた。

「コア活動層」においては、「活動への評価」では、「改善対策提言書のとりまとめ」「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」を評価する割合が高く、また、「今後重視すべき活動」では、「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」を重視する割合が高くなっていた。「コア活動層」については、「びわこ豊稔の郷」の中心メンバーであることから、核となる活動全般に対する意識が高くなっていたものと考えられる。

「自治会活動層」においては、「活動への評価」では、「地域の一斉清掃活動」を評価する割合がやや高かった。「自治会活動層」については、日頃から、地域において身近な水路や河川の保全活動に取り組む会員が多いことから、「地域の一斉清掃活動」を評価していたと考えられる。

「共感支持層」においては、「活動への評価」では、「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」を評価する割合が低く、また、「今後重視すべき活動」では、「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」を重視する割合が低くなっていた。「共感支持層」については、活動への参加の程度が低く、活動の重要性を判断するリアリティが低かったものと考えられる。

4. 「第Ⅱ期：成長・定着期」の会員層

4.1. 「第Ⅱ期：成長・定着期」の会員層のクラスター分析

2007年調査（「第Ⅱ期：成長・定着期」）について、会員の活動への関わり方の相違をもとに会員層を区分する。クラスター分析には、「調査改善活動部会への所属」「啓発広報活動部会への所属」「行事・イベントへの参加」「会議への出席」「自治会での清掃活動等への参加」という5つの設問を用いる。

5つの設問を用いて、クラスター分析（最遠法）を行った結果、会員は3つのクラスターに区分された。3つのクラスターについて、分析に用いた設問とのクロス集計を行い、各クラスターの解釈を行う（表7）。

第1に、クラスターⅠは、全体に比べ、「調査改善活動部会への所属」「啓発広報活動部会への所属」において、「所属している」とする割合が高く、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」においても、参加の程度が高くなっていた。クラスターⅠは、「びわこ豊稔の郷」への参加の程度が特に高いことから、「コア活動層」として位置付けられる。

第2に、クラスターⅡは、全体に比べ、「自治会での清掃活動等への参加」において、参加の程度が特に高い一方、「調査改善活動部会への所属」において、「所属している」とする割合は低く、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」においては、参加の程度が低くなっていた。クラスターⅡは、「びわこ豊稔の郷」への参加の程度が低い一方、自治会における水環境保全活動

表7 クラスタ分析の結果の解釈（2007年調査／「第Ⅱ期：成長・定着期」）

		クラスターⅠ 「コア活動層」 (N = 33)	クラスターⅡ 「自治会活動層」 (N = 111)	クラスターⅢ 「共感支持層」 (N = 52)	会員全体 (N = 196)
調査改善活動部会への所属 **		66.7	17.1	26.9	28.1
啓発広報活動部会への所属 *		21.2	10.8	3.8	10.7
行事・イベント への参加 **	週に1度ほど～月に1～2回ほど	42.4	0.0	17.3	11.7
	年に数回～1年に1度ほど	57.6	41.4	42.3	44.4
	まったく参加していない	0.0	58.6	40.4	43.9
会議への出席 **	週に1度ほど～月に1～2回ほど	48.5	0.0	13.5	11.7
	年に数回～1年に1度ほど	48.5	20.7	36.5	29.6
	まったく参加していない	3.0	79.3	50.0	58.7
自治会での清掃 活動等への参加 **	ほとんど全てに参加している	57.6	83.8	0.0	57.1
	関心に応じて参加している	42.4	13.5	0.0	14.8
	ほとんど参加していない、 いまだで参加したことがない	0.0	2.7	28.8	9.2
	活動が行われていない、 分からない	0.0	0.0	71.2	18.9

(注1) 単位：%

(注2) **p ≤ 0.01, *p ≤ 0.05 ※暫近有意確立（両側）

への参加の程度は特に高いことから、「自治会活動層」として位置付けられる。

第3に、クラスターⅢは、全体に比べ、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」において参加の程度がやや高くなっていた。一方、「啓発広報活動部会への所属」において、「所属している」とする割合が低く、「自治会での清掃活動等への参加」においては、参加の程度は特に低くなっていた。クラスターⅢは、「びわこ豊穡の郷」への参加の程度が「コア活動層」に比べ低く、自治会における水環境保全活動への参加の程度は特に低いことから、「びわこ豊穡の郷」への共感から入会し、選択的に活動に参加している「共感支持層」として位置付けられる。

4.2. 「第Ⅱ期：成長・定着期」の会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係

クラスター分析から得られた会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係をみてみたい。

会員層と基本属性・社会的ネットワーク（性別、年齢、職業、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度、他のボランティア団体・NPO への加入の有無）の関係について、分析を行った結果、年齢、職業、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度において、有意な差が示された（表8）。

年齢については、「コア活動層」において、全体に比べ、「60～69歳」の割合が高く、「自治会活動層」においては、「70歳以上」の割合が高く、「共感支持層」においては、「50歳未満」の割合が高くなっていた。

職業については、「コア活動層」において、全体に比べ、「パート・アルバイト」の割合がやや高く、「自治会活動層」においては、「農業」「現在は働いていない」の割合が高く、「自営業」の割合がやや高く、「共感支持層」においては、「会社員」「専門職」「学生」の割合が高くなっていた。

居住歴については、「コア活動層」において、全体に比べ、「転入」の割合が高く、「自治会活動層」においては、「地付」の割合が高く、「共感支持層」においては、「市外」の割合が特に高くなっていた。

農家／非農家については、「コア活動層」において、全体に比べ、「非農家」の割合がやや高く、「自治会活動層」においては、「農家」の割合が高く、「共感支持層」においては、「非農家」の割合が特に高くなっていた。

近所づきあいの程度については、「コア活動層」「自治会活動層」において、全体に比べ、つきあいの程度が高く、「共感支持層」においては、つきあいの程度が特に低くなっていた。

自治会・町内会行事への参加の程度については、「自治会活動層」においては、全体に比べ、参加の程度が高く、「共感支持層」においては、参加の程度が低くなっていた。

「コア活動層」においては、「60～69歳」「パート・アルバイト」「転入」「非農家」の割合が高く、「近所づきあいの程度」が比較的豊富な会員の割合が高くなっていた。守山市内でも、新興住宅地など農村地域以外に居住している会員が比較的多く、また、退職したばかりの年齢層や部分就労の人たちが多く、身体的・時間的にも恵まれた会員が多かったものと考えられる。

「自治会活動層」においては、「70歳以上」「農業」「現在は働いていない」「地付」「農家」の割合が高く、「自営業」がやや高く、また、「近所づきあいの程度」が豊富で、「自治会・町内会行事への参加の程度」が高い会員の割合が高くなっていた。守山市内でも比較的人間関係の濃密な農村地域に居住している「地付層」の高年齢の会員が多かったものと考えられる。

「共感支持層」においては、「50歳以下」「会社員」「専門職」「学生」「市外」「非農家」の割合が高く、「近所づきあいの程度」「自治会・町内会行事への参加の程度」の低い会員の割合が高くなっていた。守山市外に居住している会員が多く、現役で仕事に従事している年齢層や学生等の会員が多かったものと考えられる。

4.3. 「第Ⅱ期：成長・定着期」の会員層と「活動の志向性」の関係

会員層と「活動の志向性」との関係をみてみたい。

「これまでで重要であった活動」について、会員層による比較を行ったところ、「水質調査」「機関紙づくり」において有意な差が示された（表9）。

「コア活動層」においては、全体に比べ、「水質調査」の割合が高く、「自治会活動層」においては、「機関紙づくり」の割合が高くなっていた。一方、「共感支持層」においては、「水質調査」

表8 会員層×基本属性・社会的ネットワーク（2007年調査／「第Ⅱ期：成長・定着期」）

		「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
年齢 ** (N = 194)	50歳未満	18.2	10.9	51.0	22.7
	50～59歳	18.2	23.6	19.6	21.6
	60～69歳	48.5	36.4	23.5	35.1
	70歳以上	15.2	29.1	5.9	20.6
職業 ** (N = 191)	農業	9.7	11.8	0.0	8.4
	会社員	16.1	10.9	24.0	15.2
	公務員	9.7	13.6	16.0	13.6
	教育	0.0	2.7	0.0	1.6
	専門職	3.2	3.6	10.0	5.2
	自営業	0.0	7.3	2.0	4.7
	家事専業	6.5	12.7	10.0	11.0
	パート・アルバイト	12.9	4.5	6.0	6.3
	学生	9.7	0.0	14.0	5.2
	現在は働いていない	22.6	25.5	10.0	20.9
	その他	9.7	7.3	8.0	7.9
居住歴 ** (N = 190)	地付	34.4	44.0	12.2	34.2
	再転入	0.0	5.5	2.0	3.7
	転入	56.3	37.6	28.6	38.4
	市外	9.4	12.8	57.1	23.7
農家／非農家 ** (N = 146)	農家	24.0	48.1	5.0	32.2
	非農家	76.0	51.9	95.0	67.8
近所づきあい ** (N = 191)	相談ごとをするくらい親しくしている，よく世間話をする	56.3	58.3	15.7	46.6
	たまに立ち話をする，あいさつをするだけ，ほとんど付き合っていない	43.8	41.7	84.3	53.4
自治会・町内会行事への参加 ** (N = 192)	ほとんど全てに参加している	48.5	63.3	6.0	45.8
	関心に応じて参加している	42.4	32.1	32.0	33.9
	ほとんど参加していない，いままで参加したことがない	9.1	4.6	62.0	20.3

(注1) 単位：%

(注2) ** $p \leq 0.01$ ※暫近有意確立（両側）

表 9 会員層×これまでで重要であった活動（2007 年調査／「第Ⅱ期：成長・定着期」）

N = 184

	「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
水質調査 *	87.1	75.2	60.4	73.4
機関紙づくり *	0.0	10.5	2.1	6.5

(注 1) 単位：％

(注 2) * $p \leq 0.05$ ※暫近有意確立（両側）

の割合が低くなっていた。

「今後重視すべき活動」について、会員層による比較を行ったところ、「身近な川や水路の清掃・美化活動」「行政からの委託事業」において、有意な差が示された（表 10）。

表 10 会員層×今後重視すべき活動（2007 年調査／「第Ⅱ期：成長・定着期」）

N = 186

	「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
身近な川や水路の清掃・美化活動 *	15.6	35.8	14.6	26.9
行政からの委託事業 *	9.4	3.8	16.7	8.1

(注 1) 単位：％

(注 2) * $p \leq 0.05$ ※暫近有意確立（両側）

「コア活動層」においては、全体に比べ、「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が低く、「自治会活動層」においては、「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が高く、「行政からの委託事業」の割合が低く、「共感支持層」においては、「行政からの委託事業」の割合が高く、「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が低くなっていた。

「コア活動層」においては、「水質調査」の割合が高くなっていた。「コア活動層」については、「びわこ豊穰の郷」の中心メンバーであることから、「びわこ豊穰の郷」の設立当初からの中心的な活動の 1 つである「水質調査」を重視する会員が多くなっていたと考えられる。

「自治会活動層」においては、「機関紙づくり」「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が高くなっていた。「自治会活動層」については、地域において、身近な水路や河川の保全活動に取り組む会員が多いことから、「身近な川や水路の清掃・美化活動」を重視するとともに、地域住民に対し、「びわこ豊穰の郷」の活動を周知し、水環境保全の重要性を啓発するための「機関紙づくり」を重視していたと考えられる。

「共感支持層」においては、「行政からの委託事業」の割合が高くなっていた。「共感支持層」の中には、「守山ほたるパーク&ウォーク」「いきづく湖沼ふれあいモデル事業（環境省）」「全国都市再生モデル調査（国土交通省）」などの活動に従事していた学生等も多かったことから、「行政からの委託事業」を重視していたと考えられる。

5. 「第Ⅲ期：成熟・転換期」の会員層

5.1. 「第Ⅲ期：成熟・転換期」の会員層のクラスター分析

2015年調査（「第Ⅲ期：成熟・転換期」）について、会員の活動への関わり方の相違をもとに会員層を区分する。クラスター分析には、「環境保全学習事業部会への所属」「環境情報発信事業部会への所属」「行事・イベントへの参加」「会議への出席」「自治会での清掃活動等への参加」という5つの設問を用いる。

5つの設問を用いて、クラスター分析（最遠法）を行った結果、会員は3つのクラスターに区分された。3つのクラスターについて、分析に用いた設問とのクロス集計を行い、各クラスターの解釈を行う（表11）。

表11 クラスター分析の結果の解釈（2015年調査／「第Ⅲ期：成熟・転換期」）

		クラスターⅠ 「コア活動層」 (N = 44)	クラスターⅡ 「自治会活動層」 (N = 112)	クラスターⅢ 「共感支持層」 (N = 48)	会員全体 (N = 204)
環境保全学習事業部会への所属 **		34.1	8.9	6.3	13.7
環境情報発信事業部会への所属 **		20.5	2.7	4.2	6.9
行事・イベント への参加 **	週に1度ほど～月に1～2回ほど	36.4	0.0	0.0	7.8
	年に数回～1年に1度ほど	63.6	42.9	37.5	46.1
	まったく参加していない	0.0	57.1	62.5	46.1
会議への出席 **	週に1度ほど～月に1～2回ほど	50.0	0.0	0.0	10.8
	年に数回～1年に1度ほど	50.0	13.4	14.6	21.6
	まったく参加していない	0.0	86.6	85.4	67.6
自治会での清掃 活動等への参加 **	よく参加している	59.1	63.4	0.0	47.5
	ときどき参加している	29.5	24.1	0.0	19.6
	あまり参加していない、 いままで参加したことが ない	11.4	12.5	12.5	12.3
	活動が行われていない、 分からない	0.0	0.0	87.5	20.6

（注1）単位：％

（注2）** $p \leq 0.01$ ※暫近有意確立（両側）

第1に、クラスターⅠは、全体に比べ、「環境保全学習事業部会への所属」「環境情報発信事業部会への所属」において、「所属している」とする割合が高く、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」においても、参加の程度は高くなっていた。クラスターⅠは、「びわこ豊稷の郷」への参加の程度が高いことから、「コア活動層」として位置付けられる。

第2に、クラスターⅡは、全体に比べ、「自治会での清掃活動等への参加」において、参加の程度が高い一方、「環境保全学習事業部会への所属」「環境情報発信事業部会への所属」において、

「所属している」とする割合は低く、「行事・イベントへの参加の程度」においては、参加の程度がやや低く、「会議への出席の程度」においては、参加の程度は低くなっていた。クラスターⅡは、「びわこ豊穡の郷」への参加の程度が低い一方、自治会における水環境保全活動において参加の程度は高いことから、「自治会活動層」として位置付けられる。

第3に、クラスターⅢは、全体に比べ、「行事・イベントへの参加」「会議への出席」において参加の程度が低く、「環境保全学習事業部会への所属」「環境情報発信事業部会への所属」において、「所属している」とする割合も低く、「自治会での清掃活動等への参加」においては、参加の程度が特に低くなっていた。クラスターⅢは、「びわこ豊穡の郷」への参加の程度が低く、自治会における水環境保全活動への参加の程度は特に低いことから、「びわこ豊穡の郷」への共感から入会している「共感支持層」として位置付けられる。

5.2.「第Ⅲ期：成熟・転換期」の会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係

クラスター分析から得られた会員層と基本属性・社会的ネットワークの関係をみてみたい。

会員層と基本属性・社会的ネットワーク（性別、年齢、職業、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度、他のボランティア団体・NPO への加入の有無）の関係について、分析を行った結果、性別、年齢、居住歴、農家／非農家、近所づきあいの程度、自治会・町内会行事への参加の程度、他のボランティア団体・NPO への加入の有無において、有意な差が示された（表 12）。

性別については、「コア活動層」「自治会活動層」において、全体に比べ、「男性」の割合が高く、「共感支持層」においては、「女性」の割合が高くなっていた。

年齢については、「コア活動層」において、全体に比べ、「70 歳以上」の割合が高く、「自治会活動層」においては、「60～69 歳」の割合が高く、「共感支持層」においては、「50 歳未満」の割合が高くなっていた。

居住歴については、「コア活動層」において、全体に比べ、「転入」の割合が高く、また、「地付」の割合もやや高く、「自治会活動層」においては、「地付」の割合が高く、「共感支持層」においては、「市外」の割合が特に高くなっていた。

農家／非農家については、「コア活動層」において、全体に比べ、「農家」の割合がやや高く、「自治会活動層」においては、「農家」の割合が高く、「共感支持層」においては、「非農家」の割合が特に高くなっていた。

近所づきあいの程度については、「コア活動層」において、全体に比べ、つきあいの程度が高く、「自治会活動層」においては、つきあいの程度がやや高く、「共感支持層」においては、つきあいの程度が特に低くなっていた。

自治会・町内会行事への参加の程度については、「自治会活動層」において、全体に比べ、参加の程度が高く、「共感支持層」においては、参加の程度が低くなっていた。

他のボランティア団体・NPO への加入の有無については、「コア活動層」において、全体に比

表 12 会員層×基本属性・社会的ネットワーク（2015 年調査／「第Ⅲ期：成熟・転換期」）

		「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
性別 ** (N = 201)	男性	75.0	74.8	47.8	68.7
	女性	25.0	25.2	52.2	31.3
年齢 ** (N = 201)	50 歳未満	6.8	11.7	43.5	17.9
	50 ～ 59 歳	11.4	15.3	19.6	15.4
	60 ～ 69 歳	36.4	42.3	19.6	35.8
	70 歳以上	45.5	30.6	17.4	30.8
居住歴 ** (N = 202)	地付	29.5	34.2	2.1	25.7
	再転入	6.8	6.3	0.0	5.0
	転入	52.3	38.7	21.3	37.6
	市外	11.4	20.7	76.6	31.7
農家／非農家 * (N = 163)	農家	25.0	26.4	2.8	20.9
	非農家	75.0	73.6	97.2	79.1
近所づきあい ** (N = 201)	相談事をするぐらい親しくしている,よく世間話をする	65.1	52.3	17.0	46.8
	たまに立ち話をする,あいさつをするだけ,ほとんど付き合っていない	34.9	47.7	83.0	53.2
自治会・町内会行事への参加の程度 ** (N = 202)	ほとんどすべてに参加している	39.5	58.0	10.6	43.1
	関心に応じて参加している	53.5	33.9	38.3	39.1
	ほとんど参加していない,いままで参加したことがない	7.0	8.0	51.1	17.8
他のボランティア団体・NPO への加入の有無 ** (N = 196)	加入あり	76.7	42.1	45.7	50.5
	加入なし	23.3	57.9	54.3	49.5

(注 1) 単位：%

(注 2) **p ≤ 0.01, *p ≤ 0.05 ※暫近有意確立（両側）

べ、加入しているとする割合が特に高く、「自治会活動層」においては、加入しているとする割合がやや低くなっていた。

「コア活動層」においては、「男性」「70 歳以上」「転入」「他のボランティア団体・NPO へ加入している」の割合が高く、また、「地付」「農家」の割合もやや高く、「近所づきあいの程度」が比較的豊富な会員の割合が高くなっていた。守山市内でも、新興住宅地など農村地域以外に居住している会員が多いものの、農村地域に居住している会員もやや多く、また、「70 歳以上」が多いことから、時間的に恵まれ、他のボランティア団体・NPO にも加入するなど、社会的ネットワークの豊富な会員が多いと考えられる。

「自治会活動層」においては、「男性」「60 ～ 69 歳」「地付」「農家」の割合が高く、また、「自

「自治会・町内会行事への参加の程度」が高い会員の割合が高く、一方で、他のボランティア団体・NPO に加入している会員はやや少なくなっていた。守山市内でも農村地域に居住し、現役を退いた直後の「地付層」の会員が多いと考えられる。

「共感支持層」においては、「女性」「50歳未満」「市外」「非農家」の割合が高く、「近所づきあいの程度」「自治会・町内会行事への参加の程度」の低い会員の割合が高くなっていた。守山市外に居住し、現役で仕事に従事している年齢層や学生等の会員が多いと考えられる。

5.3. 「第Ⅲ期：成熟・転換期」の会員層と「活動の志向性」の関係

会員層と「活動の志向性」との関係をみてみたい。

「これまでで重要であった活動」について、会員層による比較を行ったところ、「オオバナミズキンバイの除去」において有意な差が示された（表 13）^{*3}。

表 13 会員層×これまでで重要であった活動（2015 年調査／「第Ⅲ期：成熟・転換期」）

N = 191				
	「コア活動層」	「自治会活動層」	「共感支持層」	会員全体
オオバナミズキンバイの除去*	33.3	35.0	15.2	29.8

（注 1）単位：％

（注 2）* $p \leq 0.05$ ※暫近有意確立（両側）

「自治会活動層」においては、全体に比べ、「オオバナミズキンバイの除去」の割合が高く、「コア活動層」においては、割合がやや高く、「共感支持層」においては、割合が低くなっていた。

「自治会活動層」においては、地域での身近な水路や河川の保全活動に取り組む会員が多いことから、外来性植物の繁殖に対しても危機感を持ち、その対策を重視している会員が多いと考えられる。また、「コア活動層」においては、「第Ⅲ期：成熟・転換期」において、水環境への直接的な働きかけを重視する「地付」「農家」の割合がやや高くなっていることから、「オオバナミズキンバイの除去」を重視している会員の割合も、やや高くなっていると考えられる。

6. 考察——地域環境 NPO の持続的活動展開と会員層

6.1. 「びわこ豊穡の郷」の会員層の 3 時点比較

「びわこ豊穡の郷」の会員層について、3 時点（3 つのフェーズ）による比較と考察を行う（表 14、表 15）。

第 1 に、「コア活動層」では、「第Ⅰ期：設立・整備期」「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」の全てのフェーズにおいて、会員全体に比べ、「転入」の割合が高く、近所づきあいの豊富な会員の割合が高かった。一方、「第Ⅲ期：成熟・転換期」においては、会員全体に比べ、「地付」「農家」の割合もやや高く、いわゆる「地付層」の参加の程度も高くなっていた。なお、「第

*3 2015 年調査においては、「今後重視すべき活動」について、会員層による有意な差はみられなかった。

表 14 「びわこ豊穡の郷」の会員層の3時点比較（基本属性と社会的ネットワーク）

		「コア活動層」			「自治会活動層」			「共感支持層」		
NPOのフェーズ		1999年調査 「第Ⅰ期：設 立・整備期」	2007年調査 「第Ⅱ期：成 長・定着期」	2015年調査 「第Ⅲ期：成 熟・転換期」	1999年調査 「第Ⅰ期：設 立・整備期」	2007年調査 「第Ⅱ期：成 長・定着期」	2015年調査 「第Ⅲ期：成 熟・転換期」	1999年調査 「第Ⅰ期：設 立・整備期」	2007年調査 「第Ⅱ期：成 長・定着期」	2015年調査 「第Ⅲ期：成 熟・転換期」
基本属性	共通点	・「転入」の割合が高い。			・「地付」「農家」の割合が高い。			・「市外」「非農家」の割合が高い。		
	相違点		・「60～69歳」「パート・アルバイト」の割合が高い。	・「男性」「70歳以上」の割合が高く、「地付」「農家」の割合もやや高い。		・「70歳以上」「農業」「現在は働いていない」の割合が高く、「自営業」の割合がやや高い。	・「男性」「60～69歳」の割合が高い。	・「転入」の割合が高い。	・「学生」「専門職」「会社員」の割合が高い。	・「女性」の割合が高い。
社会的ネットワーク	共通点	・「近所づきあいの程度」の豊富な会員の割合が高い。				・「自治会・町内会行事への参加の程度」の高い会員の割合が高い。			・「近所づきあいの程度」「自治会・町内会行事への参加の程度」の低い会員の割合が高い。	
	相違点	・「自治会・町内会行事への参加の程度」が高い会員の割合が高い。		・「他のボランティア団体・NPOに加入している」とする会員の割合が高い。	・「自治会・町内会行事への参加の程度」がやや高い会員の割合が高い。	・「近所づきあいの程度」の豊富な会員の割合が高い。	・「他のボランティア団体・NPOに加入している」とする会員の割合はやや少ない。			

Ⅲ期：成熟・転換期」においては、「70歳以上」の会員の割合が高くなっており、「コア活動層」が高年齢化していることが読み取れる。

第2に、「自治会活動層」では、「第Ⅰ期：設立・整備期」「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」の全てのフェーズにおいて、会員全体に比べ、「地付」「農家」の割合が高く、「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」においては、自治会・町内会行事への参加の程度の高い会員の割合が高かった。「第Ⅱ期：成長・定着期」においては、「70歳以上」の割合が高かったものの、「第Ⅲ期：成熟・転換期」においては、「60～69歳」の割合が高くなっており、「自治会活動層」全体としては、若返りがみられる^{*4}。「活動の志向性」においては、一貫して、地域の水環境への直接的な働きかけを重視する割合が高くなっていった。

第3に、「共感支持層」では、「第Ⅰ期：設立・整備期」「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」の全てのフェーズにおいて、会員全体に比べ、「市外」「非農家」の割合が高く、近所づきあいが豊富でない会員の割合が高く、自治会・町内会行事への参加の程度が低い会員の割合も高かった。「活動の志向性」においては、「自治会活動層」とは逆に、「第Ⅰ期：設立・整備期」

*4 2015年調査においては、2008年以降に入会した会員のうち、「コア活動層」が17人（19.1%）、「自治会活動層」が50人（56.2%）、「共感支持層」が22人（24.7%）となっており、「自治会活動層」においては、2008年以降に入会した会員も多くなっている。「自治会活動層」が入会し、参加が促進されることは、「コア活動層」の発掘にもつながるものと考えられる。

表 15 「びわこ豊穡の郷」の会員層の 3 時点比較（活動の志向性）

		「コア活動層」			「自治会活動層」			「共感支持層」		
NPO のフェーズ		1999 年調査 「第Ⅰ期：設立・整備期」	2007 年調査 「第Ⅱ期：成長・定着期」	2015 年調査 「第Ⅲ期：成熟・転換期」	1999 年調査 「第Ⅰ期：設立・整備期」	2007 年調査 「第Ⅱ期：成長・定着期」	2015 年調査 「第Ⅲ期：成熟・転換期」	1999 年調査 「第Ⅰ期：設立・整備期」	2007 年調査 「第Ⅱ期：成長・定着期」	2015 年調査 「第Ⅲ期：成熟・転換期」
活動の志向性	これまでで重要であった活動	・「改善対策提言書のとりまとめ」「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」の割合が高い。	・「水質調査」の割合が高い。	・「オオバナミズキンバイの除去」の割合がやや高い。	・「地域の一斉清掃活動」の割合がやや高い。	・「機関紙づくり」の割合が高い。	・「オオバナミズキンバイの除去」の割合が高い。	・「水環境マップ」「地域の一斉清掃活動」「インターネットのホームページ」「プロジェクト形式の活動」の割合が低い。	・「水質調査」の割合が低い。	・「オオバナミズキンバイの除去」の割合が低い。
	今後重視すべき活動	・「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」の割合が高い。	・「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が低い。		・「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」の割合がやや低い。	・「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が高く、「行政からの委託事業」の割合が低い。		・「他の環境ボランティア団体との交流」「身近な川や水路の水量の年間を通しての確保」「身近な川や水路でホタルが生育する条件の整備」「専門的な知識や情報を得るための学習会の開催」の割合が低い。	・「行政からの委託事業」の割合が高く、「身近な川や水路の清掃・美化活動」の割合が低い。	

「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」に共通して、地域の水環境への直接的な働きかけを重視する割合が低くなっていた。

6.2. 地域環境 NPO の展開プロセスにおける担い手の交叉

「びわこ豊穡の郷」の会員層の 3 時点比較をもとに、地域環境 NPO の展開プロセスにおける NPO と地域コミュニティの担い手の交叉について、検討を行う。

第 1 に、「びわこ豊穡の郷」においては、3 つのフェーズ（「第Ⅰ期：設立・整備期」「第Ⅱ期：成長・定着期」「第Ⅲ期：成熟・転換期」）において、会員構成に変化がみられた（図 1）が、会員層では、「コア活動層」「自治会活動層」「共感支持層」という安定的な構造がみられた（表

14, 表 15)。「びわこ豊穡の郷」においては、「自治会活動層」が一定の割合で継続的に参加してきていることが、特徴的であるといえよう。

「びわこ豊穡の郷」においては、地域との連携を意図し、設立時等に、各種団体からの「あて職」での参加が行われ、また、設立当初から現在に至るまで、自治会・町内会が団体会員となっており、これらのルートを通じて「地付」や「農家」といった「地付層」が継続的に加入してきている。「地付層」の参加のルートを確保してきたことは、地域環境 NPO と地域コミュニティの担い手の「会員層レベルでの交叉」につながっているといえよう。

第2に、「第Ⅲ期：成熟・転換期」においては、会員全体に比べ、「コア活動層」では「地付層」の割合も高くなっていった（表 14）。「びわこ豊穡の郷」においては、「第Ⅲ期：成熟・転換期」において、「地付層」の重視する「赤野井湾・小津袋クリーン大作戦」や「オオバナミズキンバイ除去プロジェクト」といった活動を具体化しており、このことによって、「地付層」の参加が促進されてきている（山添他, 2017a；山添他, 2017b）。「地付層」の重視する活動を具体化することは、地域環境 NPO と地域コミュニティの担い手の「会員層レベルでの交叉」とともに、「コアメンバーレベルでの交叉」にも、つながっているといえよう。

地域環境 NPO が地域社会に定着し、持続的に活動を展開していくためには、地域環境 NPO と地域コミュニティの担い手が出会い、ともに活動に取り組む「会員層レベルでの交叉」（第1段階）と双方の担い手がともに活動の中心となる「コアメンバーレベルでの交叉」（第2段階）の2段階が重要であるといえよう⁵。

「びわこ豊穡の郷」の20年間を振り返ると、“変化すること”が持続的活動展開につながっている部分と“変化しないこと”が持続的活動展開につながっている部分とが存在している。会員層という、ある種の基本構造は変化していないものの、個々の会員は入れ替わり、会員構成（山添他, 2015）は変化し、また、組織としては、地域社会のニーズや期待に応え、活動内容や組織体制を変化させてきている（山添・野田, 2018）。地域環境 NPO の動的過程、また、地域環境 NPO と地域コミュニティとの交叉を、どのように捉えていくかについては、今後、さらに研究を進めていくこととしたい⁶。

⁵ 筆者らは、環境ボランティア団体への参加を、市民・住民がボランティア団体の会員となる段階（第1段階）と、会員がコアメンバーとなる段階（第2段階）の2段階で捉えた（野田他, 2000）が、環境 NPO と地域コミュニティの担い手の交叉についても、この2段階で捉えていくことが有効であろう。

⁶ 広井は、「定常化の時代においては、（中略）各地域の風土的・歴史的な多様性や固有の価値が再発見されていくだろう」（広井, 2013：26）とし、「成長・拡大期が“地域からの離陸”の時代だったとすれば、定常期は“地域への着陸”の時代なのである」（広井, 2013：26-28）としている。地域環境 NPO と地域コミュニティの担い手の交叉については、NPO の「地域への着陸」という社会的文脈においても、捉えていくことができよう。

文献

- 広井良典, 2009, 『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』 筑摩書房.
- 広井良典, 2013, 『人口減少社会という希望——コミュニティ経済の生成と地球倫理』 朝日新聞出版.
- 菊池静香, 2005, 「自然保護・環境保全と NPO・ボランティア」 川口清史・田尾雅夫・新川達郎 編『よくわかる NPO・ボランティア』 ミネルヴァ書房, 70-71.
- 中川幾郎, 2011, 「地域分権から地域自治へ」 中川幾郎編著『コミュニティ再生のための地域自治のしくみと実践』 学芸出版社, 35-61.
- 野田浩資・亀田紘一・山添史郎, 2000, 「環境ボランティア参加の規定要因と地域社会——滋賀県守山市の赤野井流域協議会を事例として」『福祉社会研究』 1, 12-24.
- 野田浩資, 2007, 「水環境保全と NPO: ローカル・ガバナンス形成の可能性と課題」『水資源・環境研究』 20, 15-24.
- 野田浩資編, 2009, 『琵琶湖の水環境保全とローカルガバナンス——環境 NPO による多主体連携の可能性と課題』 (日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 (基盤研究 (C), 2007 ~ 2008 年度)).
- 野田浩資, 2016, 「地域社会の持続可能性と共創型ガバナンスの構築過程: 琵琶湖地域の環境史と地域環境 NPO の展開プロセス」『京都府立大学学術報告 (公共政策)』 8, 47-62.
- 野田浩資編, 2017, 『多主体連携による持続可能な地域社会経営——共創型環境ガバナンスの構築過程の検証』 (日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 (基盤研究 (C), 2014 ~ 2016 年度)).
- Pekkanen, R., 2005, Japan's Dual Civil Society: Members without Advocates, Stanford University Press. (= 2008, 佐々田博教訳『日本における市民社会の二重構造——政策提言なきメンバー達』 木鐸社.)
- 霜浦森平・山添史郎・塚本利幸・野田浩資, 2002, 「地域環境ボランティア組織における自立と連携」『環境社会学研究』 8, 151-165.
- 霜浦森平・山添史郎・植谷正紀・塚本利幸・野田浩資, 2009, 「地域環境 NPO の活動の包括性とジレンマ——滋賀県守山市の NPO 法人『びわこ豊穰の郷』を事例として」『環境社会学研究』 15, 104-118.
- 鳥越皓之, 2014, 「コミュニティが支配権をもつ風景——そこに住む者が風景をつくる」 中村良夫・鳥越皓之編『風景とローカル・ガバナンス——春の小川はなぜ失われたのか』 早稲田大学出版部, 63-92.
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資, 2003, 「地域社会における水環境保全の『担いのしくみ』——滋賀県守山市を事例として」『水資源・環境研究』 16, 9-20.
- 山添史郎・霜浦森平・植谷正紀・塚本利幸・野田浩資, 2008, 「地域環境 NPO の参加者の居住歴と活動の志向性——滋賀県守山市の NPO 法人『びわこ豊穰の郷』を事例として」『水資源・

環境研究』21, 25-34.

山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資, 2014, 「地域環境 NPO の会員層のクラスター分析——滋賀県守山市の NPO 法人『びわこ豊穰の郷』を事例として」『水資源・環境研究』27 (2), 44-50.

山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資, 2015, 「地域環境 NPO の会員構成の変化——NPO 法人『びわこ豊穰の郷』を事例として」『京都府立大学学術報告（公共政策）』7, 23-35.

山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資, 2017a, 「地域環境 NPO の展開プロセスと参加層の変化——NPO 法人『びわこ豊穰の郷』の会員アンケート調査の3時点比較」『水資源・環境研究』30 (2), 66-72.

山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資, 2017b, 「地域環境 NPO における社会運動性と事業性——NPO 法人『びわこ豊穰の郷』の展開プロセスと会員の参加の様態をめぐって」『京都府立大学学術報告（公共政策）』9, 39-58.

山添史郎・野田浩資, 2018, 「地域環境 NPO の持続的活動展開と多面的役割——NPO 法人『びわこ豊穰の郷』を事例として」『水資源・環境研究』31(1), 58-65.

付記

NPO 法人「びわこ豊穰の郷」の皆様には、長年にわたり筆者らの研究グループの調査にご協力いただいている。ここに記して感謝の意を表する。本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）『多主体連携による持続可能な地域社会経営——共創型環境ガバナンスの構築過程の検証』（研究代表者：野田浩資〔京都府立大学〕, 2014～2016 年度）による研究成果の一部である。

（2018 年 10 月 1 日受理）

（やまぞえ しろう 滋賀県日野町役場長寿福祉課／日野町地域包括支援センター主任）

（つかもと としゆき 福井県立大学看護福祉学部教授）

（しもうら しんぺい 高知大学地域協働学部准教授）

（のだ ひろし 京都府立大学公共政策学部教授）